



二期生 フジコ・ヘミングさんは前3列目左から2人目、後列左から3人目は米山梅吉校長先生

## 緑岡初等学校二期生

## フジコ・ヘミングさんが語る 初等部の思い出



令和元年6月 フジコ・ヘミングさん宅にてインタビュー

初等部はすべてがこじんまりとしていました。先生もおっかなくなかった。好い時代だから。今驚くのは、今の子どもってみんな腕時計持っていて、携帯持っていてないものないでしょ。私たちの時代は、こんな金持ちの子ばっかりなのに、ひとりとして腕時計持っていないし、東横線で家へ帰る人がみな定期をぶら下げているのだけが目立っていました。

土曜日に合同体操というのがあって、全校で鬼ごっこするんです。それがすごく嬉しかった。

3月2日に学校中でやる音楽会があって、そこでピアノを弾きました。10歳の時にはNHKから頼まれて、ショパンをよく弾いたなど。あのころ全部生放送、今生放送なんてぞつとするわ。

1クラス30人くらい。その中にイギリス人の子と中国人の子と私がいました。

米山梅吉校長先生は、人にも聞かないで教室に入ってらっしゃる。私はわりと後ろの方だったから、頭をこうやってなでてくれました。忘れられなかったのは「人にされてイヤなことは自分はしない」っていつも言っていた。私、子どもながらに感激しました。それだけ人間はやっていればいいのに、みんな忘れちゃって人を傷つけて喜んでいる人が多いから…。

# 春季例祭報告



式典 積理事長



ソナタ  
奏鳴曲の子どもたちの熱演



講演 落合楼 村上氏

日時 2019年4月20日(土) 午後2時～

場所 米山梅吉記念館ホール

●講演

[講師] 伊豆湯ヶ島温泉 落合楼 村上 主人  
株式会社おちあいろう 社長  
村上昇男(のりお)氏

[演題] 『青山学院緑岡初等学校と落合楼』

●アトラクション

民芸集団 奏鳴曲(ソナタ)

全国優勝など数々のタイトルを持っている  
子どもたちのチームです。

●懇親会



民芸集団 奏鳴曲

## 春季例祭 講 演

# 青山学院緑岡初等学校と落合樓

講師 落合樓 村上 主人

村上昇男 氏



私は1964年(昭和39年)、ここ長泉町で農家の次男坊として生まれ育ちました。旧姓は小坂と言います。大学を卒業してサラリーマンを5年経験し、結婚した相手が、伊東市の温泉旅館の長女だったので、そのまま婿に入ったのが私の旅館キャリアの始まりです。

それから10年後2002年に「落合樓」の5代目となります。そして16年経った昨年12月、社長業を引退致しました。金融機関様・株主様・親族に支えられながら16年続けることが出来ましたが、約3年ほど前から流石にこのままでは、今の私の力だけでは落合樓の文化財の建物を10年20年、更にその先まで残すことは難しいと判断し、落合樓の歴史的価値を認めて頂き、且つ、更なる付加価値を加えて後世に繋いでくれる可能性のある企業を探し始め、昨年その会社に巡り会うことが出来た訳です。その100%出資子会社「(株)おちあいいろう」として昨年12月に生まれ変わり、5代目主人は変わらずにいる次第です。

落合樓は、初代足立三敏(みつとし)が明治7年(1874)に創業した「眠雲閣」が始まりだと伝えられています。創業から7年後明治14年(1881)に、幕末の三舟のひとり、山岡鉄舟によって「川と川が落合うほとりに建つ宿」と歌われて「落合樓」の名が生まれます。そこから「眠雲閣

落合樓」の屋号で、平成14年まで約130年間続きます。途中、昭和8年に大改築を行います。その時に建築された建物が今も現存している、国の有形文化財に登録され

ている建物です。

創業当初は、民宿に毛が生えた程度の宿だったはずですが、なぜ大改装が出来たのか?その理由は足立家が湯ヶ島の金山(持越鉱山)のオーナーだった時代があったからです。

初代 足立三敏さんは、40年の歳月をかけて、大正3年(1914年)に金銀鑛脈を掘り当てます。そこから莫大な財産を築いていったと思われますが、昭和初期には三井系の鑛山会社へ売却していたと伝えられております。因みにどれほどの規模の鉱山かと言いますと、昭和6年に東京鑛山監督局が発行した資料には、土肥金山 金銀鑛 45,000t 約97万円(36億円)一方、持越鉱山 金銀鑛 16,000t 約31万円(12億円)と記されています。(昭和6年当時 金1g 単価 1.36円、平成31年 約5,000円(3,700倍))いくらで売却されたのかは定かではありませんが、間違いないなくその売却資金を使って、昭和8年(1933)初代足立三敏さんが亡くなられた年、2代目足立顕治さんが総工費25万円(約9億円)掛けて、昭和の大改築を行ったわけです。時代は昭和恐慌からまだ3年



落合樓玄関前に整列

程しか経っていない時代です。まだ景気が回復する直前であろう時期に設備投資をする訳です。伊豆半島の景気回復の浮揚策として、2代目の顕治さんは生きたお金の使い方をされていた事になります。

初代が一生を掛けた金山開発の恩恵を受け継いだのが2代目です。普通なら、安い方向に走りがちですが、落合楼の2代目顕治さんは、地域貢献、社会貢献にそのお金を使っていました。お金の使い方は誰かと似ていますよね。

3代目足立重(あつし)は、旧姓は穂積重(ほづみあつし)、伊豆大仁出身で、足立顕治の娘(松江)と結婚し、落合楼の3代目となります。大正14年(1926)に青山学院を卒業し、留学から戻られた昭和4年(1929)に青山学院の講師になります。

4代目は、足立顕(あきら)で、16年前に私にバトンを託していただいた方です。顕社長もお爺さんの顕治さんに劣らず、とても素晴らしい人格者でした。ただ、事業が上手くいかなくなつた事でとても苦労をされていた方でした。

青山学院緑岡初等学校は、米山梅吉先生の私財によって計画されました。1937年(昭和12)当時、キリスト教主義の青山学院の小学校では認可されなかったので、別財團を立ち上げて「青山学院緑岡小学校」として開校されます。現在の青山学院は渋谷区渋谷4丁目にありますが、当時小学校が渋谷区緑岡町にあったことから、その名前は由来しているそうです。1941年(昭和16)、開戦の年に「国民学校令」の影響により私立小学校は「小学校」の名前が使えなくなり、校名を初等学校へ変



教師の先導で疎開先へ出發

更。初代校長は米山梅吉先生です。そして、1944年(昭和19)、アメリカ軍の本土空襲が現実

化を帯びた事で「学童疎開促進要項」が発表されます。小学3年生から6年生を、都市部から少しでも安全であろう地方へ避難させる国の政策として、学童疎開がはじまつたそうです。



子供らを落合樓に見舞う梅吉校長(前列中央)と教職員

当時、米山先生はこの学童疎開政策が児童の安全と成長を守るものとは思えなかつたと思われて「集団疎開」そのものに反対の立場をとつていたそうです。ただ、国策として実施しなければならないのであれば、できる限り児童達により良い環境を、と手を尽くした事の一つが「落合楼」を疎開先に決めた理由ではないかと言われております。

3代目足立重(あつし)は、大正14年(1925)に青山学院を卒業し、昭和4年(1929)に青山学院の講師になります。昭和19年当時は、足立重の3人の子供が緑岡初等学校に在籍していました。足立重は、兄の影響なのか初等学校の校歌の作者でもあります。

この様な縁を持つながらも、「落合楼」の集団疎開へはハーダルがあったそうです。疎開は国策で疎開先を勝手には決められない。当時、渋谷区が決めた疎開先は「嵯峨沢館」でした。疎開した児童の総数は、「渋谷区学童集団疎開宿舎一覧表」によると、男子96名女子96名、計192名、付添職員 教員7名 保母8名 作業員2名 計17名209名が寝食をともにされました。今日のお話は『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』をベースにさせていただいております。

米山先生は子どもたちを心配して落合樓を訪問しています。狩野川で泳いだり釣りしたりしたなんでしょうね。多分、食糧事情は相当貧しかったでしょうから、わらびとりや魚釣りは自分たちの食糧確保の意味もあったでしょう。



落合樓廊下での点呼



食料の一助 魚釣り

皇太子様(今月末に退位される今上天皇)の11歳の誕生日(昭和19年12月23日の前日22日に発表)にあたり、香淳皇后様が疎開児童の憂いをおもって、御歌(みうた)と共に、ビスケット25枚入り一袋を疎開児童並びに教員に対し下賜(かし)されました。

次の世を 背負うべき身ぞ たくましく  
正しく伸びよ 里に移りて

昭和20年3月10日以降空襲が激しくなり、関東近郊は危険であるということで、6月10日、子どもたちは弘前(ひろさき)に向けて出発します。そして、米山先生は翌年昭和21年4月28日にご逝去されます。

戦時中、公立学校と比べ、私立学校は大変厳しい状況であったにも関わらず、疎開児童達の環境をできるだけ整えようとされた米山先生や教員の皆様のご苦労が、ここに記録されています。また、児童達がたくましく育っていく姿も書かれています。

是非、ロータリアンの皆様に米山先生が心血を注がれた青山学院緑岡初等学校の事、学童集団疎開では親元から離れて暮らす児童に心を寄せられていた事を記憶していただきたい。しかも、その当時の姿のまま、建物に限らず、環境や湯ヶ島の人々の温かさが、今も同じく残っているを感じて頂きたいと願っています。現在、7つの木造建築が、国の有形文化財に登録されています。国宝・重要文化財は政府から維持管理の補助金を交付できる対象ですが、我々登録有形文化財は、全て自腹で維持管理をしています。すなわち、皆様にご利用いただく事こそが「落合樓」を守る唯一の方法ということです。ぜひ皆様のご来校を心よりお待ち申しております。

(3・4・5頁写真は青山学院資料センター提供)

### 新収蔵品紹介 故 米山 東一郎 氏 記念メダル(米山梅吉長男)



大正9年10月 横浜外人俱楽部・走り高跳び競技

1921年1月、米山の長男東一郎が急逝します。走り高跳びの選手としてオリンピック選考予選にも参加するほどスポーツが得意な快活な青年の20年という短い人生でした。その前年に東京にロータリークラブを設立し、多忙を極めていた梅吉ですが、「兒の臨終骨肉の慟哭、其の刹那の光景は髣髴として今猶眼に在り、涙長へに乾かず」と深いかなしみに包まれます。

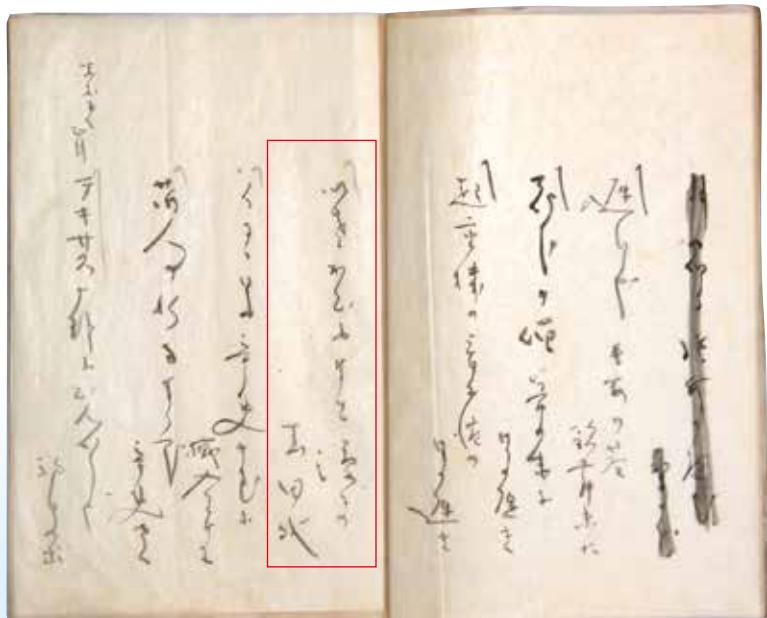
しかし、自ら筆を執り亡き子の思い出の追悼集『東一郎』を7月に出版。また、慶應義塾体育会には「故米山東一郎君記念五哩マラソン賞」を寄附します。このマラソン賞がいつまで続いたのか詳しいことはわかりませんが、メダルから戦後まで継続されていた様子がうかがえます。

# 青から 春へ

井口 賢明 (沼津北RC)

何か判じ物のような題名です。しかし、米山梅吉翁の俳句について、記念館の意を承けた、重要な問題提起を含むものでの、恐れ入りますが終りまでお目通しいただき、記念館までご意見をお寄せいただければ幸いです。

米山さんが俳句を嗜なんだことは知られています。その俳句の一つに「いさかひもなく漫々の青田かな」という句があります。米山さんの句としては最も多く人口に膾炙されるものであります。



草稿たる『藍壺俳句』の問題の句

米山さんもこの句が気に入っていたと思われます。というのは、米山さんは、自身が建立した句碑が分っているもので、二基あります。そのうちの一つがこの句を刻んだものです。これは、当初、米山さんの長泉町下土狩駅前の別邸の建物の前にあった(ようです)が、現在は、巡り巡って、これが米山梅吉記念館の境内の誰にでも目の付くところに設置されています。折りがありましたら、じっくりご覧になって、問題の字が春か青かも識別してみて下さい。

問題は、この句の下五の「青田かな」が「春田かな」ではないかということです。

この経過をたどってみます。9年前に、米山梅吉記念館報(VOL.14 平成21年秋号 拙稿「米山梅吉と俳句」)で問題提起をしたことがあります。しかし、そのまま推移してきました。ここでは、紙数の関係で詳しくは触れませんが、前掲館報で米山翁の俳句をめぐる問題をも含めて、詳述したつもりですので、興味のある方は、その号の拙稿をご覧下さい(記念館のホームページで以前発行の館報掲載内容を見ることができます)。



「いさかひもなく…」の句碑とその拓本

この句が最初に公刊物で見られるのは、白人集(昭9.9.5 白人会発行)238頁です(※1)。ここでは、以下のことからすれば当然ですが、春田です。その後、「米山梅吉選集下巻」(昭35.5.4 青山学院初等部発行)「藍壺俳句」で青田となります。『米山梅吉伝』(昭35.5.4 青山学院初等部発行)「俳句選集」でもそうです。ただし、選集の方の句は「水漫々の」と水が入っています。『米山梅吉伝』が米山さんの伝記としてオソライズされるようになったことから、以後は疑われることなく、今日まで青田で語り継がれてきました。

記念館で、このことが問題とされたのは、記念館創立40周年事業として米山さんの俳句を整理したときです。

米山さんは、『東また東』、『四十雀』、歌日記『八十七日』などの歌集を出版していますが、俳句集は、自身で出版したことありません。しかし、出版を考え、その準備をした節がみられます。記念館の2階陳列室にその草稿といつてもよい『藍壺俳句』があります。

記念館では、前述のように創立40周年事業として、米山さんの俳句を整理し、米山さんが未済のままとした俳句集を刊行することを計画しました。



米山の画号のもとになった鮎壺の滝(藍壺)と富士山

このため、記念館所蔵の草稿と思われる『藍壺俳句』を精査、見直すとともに、米山さんが所属した句会、白人会(※2)での句の採取を手掛けました。この結果は、米山梅吉俳句集『藍壺俳句』として刊行しました(平21.9.19 記念館編集・発行)。筆者は、この編集に関与したのですが、その編集の段階で、青ではなく春であろうことに気がつきました。したがって、あとがきで(74頁)、このことについては触れました。筆者は、このことをもっと広く伝えようと思い、前掲館報でその内容を更に敷衍したわけです。



米山自身による自画像

そこで、なぜ「青田」でなく、「春田」なのかの根拠を次の観点から、改めて検証し、これを示してみます。

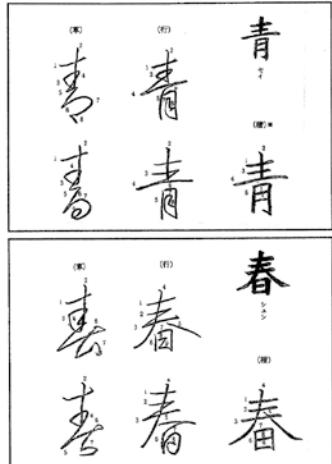
#### ①この句の作句機会と動機

この句が作られたのは、白人会での句会のとき(大6.4.14 於 竹芝館)ですが、そのときの句会での季題は「春田」です。このとき、米山さんは、この句会に出席し、本件の句を含め「月影も色どる春の田毎哉」「津の国は蒼海原の春田哉」「春の田は女神の写す鏡かな」と4つを作句しています。このことからすれば、米山さんが自身で推敲し青田としたという確証がなければ、春田とするのが自然となります。

#### ②実際の字の検証、米山さんの他の春、青の字との対比

草稿たる『藍壺俳句』は、米山さんの筆によるもの<sup>くだん</sup>です。この草稿では、問題の句(前頁の写真)の件の文字は青でなく春と読みます(※3)。この草稿には他

に春の字が26字、青の字が5字見られます。これらを対比しても、やはり、本件句の問題の文字は、春と読めますし、春の字とすることに支障はないと思われます。したがって、この点からも春田とすべきということになるのでしょうか。



漢字・楷行書 筆順大辞典(上巻)

発行所 東京書道教育会

#### 『楷行草 書筆順大辞典』の青と春

なお、米山さんに青と春の字が同時に存在する句が1句あります。No.217(※4)は、「青瓢(アオフクベ)春は名所の村はずれ」という句です。青と春の字が同時に存在するだけに、これなどは対比し易いことになります。ただ、これは米山さんの筆となる『藍壺俳句』の草稿にはなく、白人会の句会からのもので、米山さんの筆跡としては確認できません。

#### ③米山さんの意思

米山さんの意思としても、春田と考えるのが至当です。先述のように『藍壺俳句』たる草稿は、句集出版の準備のための草稿と思われます。この場合、句の配列をどうするかとすれば、作句の順、季節の順など統一的な基準によるのが一般的でしょう。米山さんの草稿たる『藍壺俳句』では、初めの方に春の句が多く見られるなどから、一部の例外を除き、春夏秋冬の順によったと見られます。

ところで、春田(苗を植える準備のころの田)は春の季語、青田(夏も深まり、稻が青々……若い稻の生命力に満ちた青色……と育ってきた頃の田んぼの様子)は夏の季語です。米山さんは、問題の句を春の部

分に配置させています。もし、これを青田と意識しているなら、米山さんは、夏の句の方に置いた筈ではないでしょうか。

このようなことで春田でよいということに相当自信を持っていたのですが、筆者は、前記拙稿を掲載するについて、逡巡しました。静かな水面に石を投げこんで、波紋を生じさせ、收拾がつかなくなることを恐れたわけです。たしか、このころは、内藤理事長が他界された直後だったので、元理事長に相談したら、事実では仕方ないだろう、私はかえって春田の方がイメージがよく、米山さんの意に叶うのではないかと思うといわれたことを記憶しています。

以上の次第で、問題の句は青田でなく、「いさかひもなき漫々の春田かな」ということになるだろうと思います。

何故、今また同じ問題を繰り返すのかといわれるだろと思います。これには次のような事情があります。

記念館は、50周年記念事業の一つとして、低年齢層向けに、米山梅吉翁を普及するため銀の鈴社から『米山梅吉ものがたり』を7月1日発刊いたしました。その中で、この問題の句が取り上げられ、これを春田とするということのようです。一般の方だけならそれでかまわないでしょうが、当然、ロータリーの関係者も目にするであろうとき、混乱が生じないかを心配し、事前に情報を提供する必要を感じられたようで、以前問題提起した前科のある筆者に、再犯を起こさせようと再度その役目を振ってこられたようです。

※1 正確に言えば、『白人集』の編集の基になった俳句誌『木太刀』(大6.5.5発行)の白人会の記事の方が早いことになる。これには、「白人会 4月14日例刻より 芝櫻田本郷町竹芝館で四月例会開催」とし、題を春田として、この句「いさかひもなき漫々の青田哉 尋九」とこの句が記載されている。その前月号(大6.4.5発行)では、次回の題として、遅日春田が予告されている。

※2 米山さんは、大正5年11月、巖谷小波の主宰する白人会という俳句の会に入会している。白人会のことについては、館報No.14参照。

※3 春につき、續木湖山編著『楷行草書筆順大辞典』上巻(東京書道教育会発行2002.7.21)。青につき、同書下巻(東京書道教育会発行2002.7.21)。

※4 平21.9.19記念館編集発行の『藍壺俳句』の整理番号。

# 米山梅吉の著作を じかに読むシリーズ

その3

## 「常識關門」

米山梅吉は母校青山学院で、大正10年から「常識講座」を担当したことがあります。

これが広く学生間の大評判となり、米山自身もこれを常識読本として公にしたい希望があった所、

昭和11年に実業之日本社から「常識關門」として出版されました。

今回はその中から、一「常識第一」から三編、三「常識の養成」から二編を選び掲載します。(原文のまま)

### 一　「常識第一」

○常識の意味  
凡そ人の身を立て世に處せんとするには、必ず先ず常識の門を叩いて其の表玄關に刺を通じ(注1)、斯くて社會の大廣間に案内されなければならぬ。其處には既に先著の客もあるべし、先客必ずしも抜群俊秀の士とは限らず、後れて来るもの亦た必ずしも碌々無為の人にはあらず。徐に左右を顧みて然るべく己が座を占め、挙措應待宜きを得ざるべからず。其の無禮又は失態なきやう注意すべきは勿論のこと、苟も稠人(注2)の中で擯斥(注3)を蒙るが如きことがあってはならない。社會の大廣間における作法、我輩は之を常識と稱するものである。  
英語コンモンセンスを誰が常識と翻譯したの



青山キャンパス大正7年頃

青山学院資料センター提供

であらうか。彼の明治大先覺の著とすべき『福澤全集』数百篇の文字、説く所は通俗平易を主とし、理窟に走り實地に遠ざかるの弊を諫め、悉く是れ常識的のものならざるなき中に、未だ此の二字の用ひられてゐるのを見ないやうである。後果して何人が常識という成語を使ひ始めたのであるか詳にしないが、近頃の如き冗長ながやすほんやくふうおいおそこ長に流れ易い翻譯風に於てすれば、恐らく此の字面だけに納めることは出来ないのかも知れぬ。コンモンセンスを常識とは簡潔眞に妙を得たる譯語を作せるものにて、今將た何の説明をも要せざるものゝ如くである。

(注1)刺を通じ:相手に名を知らせて都合を探すこと。

その名札を名刺という。

(注2)稠人:(ちゅうじん)びっしり集まっている多くの人

(注3)攘斥:押し出す

## ○誤れる常識觀

しかし、わがはい、あへ、ご、たせう、げんせつ  
然るに、我輩が敢て茲に多少の言説をなして  
その意義を糺し、以てこの常識門の哲理を尋ねて見ようとするのは、道は平々坦々極めて分明なるが如く見えて、人は皆な長安に透るといふことは難いからである。人は常識々々とて此語を便利に使用し、一種の世才の表現に過ぎないもの、如くに看做し、進んで之を道徳的に實践的に考察することをなさず、單に雨は濕すものの風は乾かすものと謂ふ如く、或は長安は日より近しと謂ふが如くに、當意即妙に物事を判断し、専ら功利主義により迅速に其を處理して行くことが、常識の活用であるとするのは大なる錯誤であって、常識の眞の意義を没却するものである。

天地萬有に對する人間の意識は自然の作用であって、其の先ず直感より來ることは言ふまでもない。其處に人間の本能の働きがあり、立どころに事物を意識し之を判断するに相違なくも、視るのは目のみでなく、聽くのは耳にのみによるるものではない。人智が進み環境が變化して、學問上にも實際上にも昨のはなるもの今は非となり、生活の方法は益々複雜となり社會の事象が愈々多岐多端となるに従ひ、人間は其

の直感に基き本能に任せて足るといふことができ出来なくなつたのである。

直感を番頭として本能を主人として、其の支配によって事物を判断し處理した社會は、進化の尚ほ幼稚で、單純な生活に従つてゐた時代に属する。日進月歩變動極りなくして激甚なる生存競争に従ふこと今日の如く、政治、宗教、經濟其他一切の問題に對し學問と實際とが交渉を切にし、兩者の胡越の如くなるを許さず、現代に在ては、凡そ事物の判断は切磋研究の結果で、學問を金とし實際を玉としたもので莫ければならない。今は無稽にして根據なき常識は之を承認しないのである。



常識關門初版本

## ○経験は常識の賢母

しかまたこのたじたぼうしゃくわいひとひじ併し又、此の多事多忙なる社會に人は日々の業務に追はれ、目前には大小無数の問題が送迎に遑なきほど現はれて来る中を、一々研究的に之が判断を遂げ以て完全に事を處理してゐかんほつわううしゅんじゅんかへつこうきくわい遺憾なきを欲すれば、往々逡巡、却て好機會を

いつ ふかく そんかい まね ここ にん  
逸して不覺の損害を招くことがある。此處に人  
げん もっと そんちょう けんけん そんさい  
間の最も尊重すべき経験てうものが存在する  
けんけん まこと じゅうしき は  
のである。経験こそ洵に常識の母で、しかもスト  
りう けんほ こゝ しょう じゅうしき ちく  
イック流の賢母である。此に生ずる常識は、直  
せつ ちかく ほんのう はたら てうえつ いつ  
接の知覚をも本能の働きをも超越して、何時か  
よ どう や たんれん かう ま りけん そ  
能く陶冶鍛錬されたる降魔の利剣となり、其の  
えいほう おそ ひと しん よ けいけん  
銳鋒は畏るべきものである。人が眞に能く経験  
みが じゅうしき いた こんにち しゃくわい た  
に磨かれざる常識を抱いて今日の社會に立た  
つけやきば どんとう じ てきちゅう い  
うとするのは、付焼刃の鈍刀を持して敵中に入  
るやうなものであらう。

じゅうしき れきし てきいんねん ちり てきくわんけい  
さて又た常識には、歴史的因縁、地理的關係  
そのた じじやう ふすい そ ぶんり  
其他の事情が附隨するのであって、其が分離  
また そうがふ せんしゅ ばんやう な だいせうなん  
され又は綜合されて千種萬様を作し、大小難  
い おうよう こと かうくわ おな そもそも また とき  
易應用も異なり効果も同じからず。抑も亦た時  
ば あいすなは たいしょう いかん は そのひと ち  
と場合則ち對象の如何により、將た其人の知  
しき ともな けいけん たしょう はんだん きけつ  
識にも伴ひ経験の多少にもより、判断の歸結が  
てん ち うんじゅう さ もた ここ お  
天地雲壤の差を齎らすことがあらう。此に於  
じゅうしき ひと よ しょ た きは ちゅうはう  
て、常識は人の世に處する爲め極めて重寶の  
またあるひ む かち  
ものであり、亦或は無價値ともなることである。

### 三 「常識の養成」

わがはい じゅうしき かうざ  
○我輩の常識講座

いま ねん まえ わがはい あおやま がく  
今より十六七年も前のこと、我輩が青山學  
院に於て毎週一回の科外講義を引受け、常識  
はんだん だい か けいざい もんだい しゅ そ じつさい  
判断の題下に、經濟問題を主として其の實際  
そく せつ わ つづ たう じ たれ い  
に即して説話を續けたことがあった。當時誰言  
これ よねやま じゅうしき かうざ しょう ある  
ふとなく之を米山の常識講座と稱したのを、或

いうりよく しん ぶんし ひやうろんか つた き よ  
有力なる新聞紙の評論家が傳へ聞き、「世に  
いま じゃうしき くわがく し れいひやう  
未だ常識なる科學あるを知らず」など、冷評し  
かく ごと とかく ものし せんせい じゃう  
たのであった。此の如きは兎角物識り先生の常  
しき か しょうこ いま な じゅうしき  
識を缺いている證據であって、今も尚ほ常識を  
もつ きは ほんよう ちかく す がくもん  
以て極めて凡庸なる知覺に過ぎずとなし、學問  
まったく ぼつかうせふ ま そ なか てつ  
などとは全く没交渉のもの、況して其の中に哲  
り ぞん はず しゐ ひと  
理などの存する筈がないと思惟している人もあ  
も じゅうしき そくさ はんだん これ ともな ひと  
らう。固と常識は卽座の判断が之に伴ふべき一  
かた み しゃくわいじょうせい へんくわ とも  
つの型であると見て、社會情勢の變化と共に  
そこ つね あら し ま  
其處に毎に新たなるものがあるのを知らず、又  
じゅうしき せう これ しゃうじょう おさ う  
た常識とは小にして之を掌上にも収め得べしと  
いへ だい そ うちう またが ばうばく  
雖ども、大にしては其が宇宙に跨って磅礴(注1)  
し したが これ  
たるものであるを知らないのであって、隨って之  
やうせい やが にんげん しゃくわい くわんせん た  
が養成は、軀て人間と社會を完全にする爲め  
きづ  
であることに気附かないのである。

ゆ らい にほんじん がくもん す と かく もの ごと り  
由来日本人の學問好きなる、兎角物事を理  
くつ もつ かいしゃく とき それ どら まつた  
届のみを以て解釋し、時には其に捕はれて全く  
ふ ひつえう けんきう こゝろ すべ がくもん じつせい  
不必要的研究をさへ試み、總ての學問が實生  
かつ はな かんが つい じゅう  
活と離れないものであるとは考へず、遂には常  
しき かち むし わうねん  
識の価値を無視することになるのである。往年  
こう し がくかう そつけふせい そ こうきう がくもんくわい  
公私學校の卒業生が其の攻究せる學門科以  
がい じゅうしき しょう また けつぱう がいたん  
外、常識と稱すべきもの、全く缺乏せるを慨嘆  
しきしゃ おお わ けういく ほうしん かいりょう  
せる識者により、大いに我が教育方針を改良  
こえ やかまし がくかう けう  
すべしとの声が喧かったことがある。學校教  
いく がせい どほ せんもん  
育は學生をしてコンモンセンスより遠ざけ「専門  
はし てうせう ひと  
センス」に走らしむるものと嘲笑する人さえあつ  
これ つうへい あきら それまで  
たが、之を通弊と諦めれば其迄のことである  
けういく じつぶつ うと り ろん へんけい  
が、教育が實物を疎んじて理論にのみ偏傾す

そつげふせい よ たうせい じ む てき  
るは、卒業生をして能く當世の時務に適するを  
え ゆえん 得せしむべき所以ではない。

もっと スコットランド わうじ しょうどう  
尤も蘇格蘭には往時コンモンセンスを唱道

がくは き おも そ  
せる一つの學派もあったと聞くが、思ふに其は  
にんげん ほんのう しゅつぱつ ばんいう けんしゃう かいしゃく  
人間の本能より出發して萬有の現象を解釈し

てつがくじょう ば けんきゅう ぞく  
ようとした、哲學上一派の研究に屬したもので

こんにち い にんげんしきわい  
あらう。今日の謂うコンモンセンスは人間社會の  
じっさい せいくわつ そく たんにん きょう  
實際生活に即したイデオロギーであり他人と共に

つう い しき もとづ かつどう つ  
通なるべき意識に基く活動に就いてある。フィ

てつがく よ それ もつば けいじ  
ロソфиーを哲學とのみ讀めば、其は専ら形而  
じょう がくもん ぞく およ なん  
上の學問に屬するもののやうであるが、凡そ何

みち そ なか かなら あるてつり たず  
の道にも其の中には必ず或哲理の尋ぬべきも

あ そん ばんじ くわ がくくわ  
のが在って存するのである。萬事を科學化す

りうかう こんにち よ なか かり  
ることの流行する今日の世の中で、假にコンモ

どりあつか これ  
ンセンスを取扱って之  
じゅうしきがく しよう  
を常識學と称するこ  
ま かなら ふ か  
と、亦た必ずしも不可  
し  
ではないかも知れぬ。



菜根譚・米山の一節

第2版

(注1) 磅礴: (ぼうばく) 広くみちふさがる様

## ○ 言行一致が紳士道

う じゅ むかし いたずら しょ よ これ おうやう  
迂儒とは、昔の徒に書を讀んで之を應用す

し かんがくせんせい かうむ あくみやう  
ることを知らなかつた漢學先生に蒙らせた悪名  
こんにち がくしゃ このるい  
であるが、今日の學者にも此類なしとすることを  
え し ほう じつ む か り ろん む  
得ないかも知れぬ。一方に實務家が理論を無  
し じゅうしき てんは ものごと あた とくい  
視し、常識一天張りで物事に當る得意とする  
そ まえ う じゅ えら  
ものがあれば、其は前の迂儒と撰ぶところがな  
じつ む か じぶん けいけん ほこ た  
い。實務家が自分の經驗の誇るに足るものがあ  
しうやう こと がくもん おも たう  
あっても、修養を事とせず學問を重んぜず、當  
めん そくせき はんだん したが こと ほんまつ きは  
面の即席判断に従ひ事の本末を究めることが  
つい しつぱい ただ みすか きすつ  
なければ、終には失敗して啻に自ら傷くのみな  
た にん がい しゃくわい どく けくわ  
らズ、他人を害し社會を毒するの結果となるの  
じゅうしき やうせい へいせい い もち  
であるから常識の養成には平生意を用ひるこ  
ばんばん  
と萬々でなければならない。

げんこう ち しんし だう もつと じゅうえう じょうけん  
言行一致は紳士道の最も重要な條件で  
か い とこかなら これ おこな い  
ある。斯くて言う所必ず之を行ふと云ふのは、  
それ じゅうしき もつ よくそく う  
其が常識を以て約束し得るものならざるべか  
しか じつせんきゅうかう どうとく これ もと  
らず、而して實踐躬行(注1)の道徳は此に基づ  
じつこう じゅうしき これ かた  
くことである。實行なきところに常識なく、之を語  
む せき にん いちじ てほうだい まぬか  
るも無責任なる一時の出放題たるを免れざる  
みすか これ おのれ ほどこ よろ う もち  
べし。自ら之を己に施して宜しきを得べきは勿  
ろん た にん た はか ゆうえき ちゅうげんじょよく  
論、他人の爲めに計りては有益なる忠言助力  
つい せいこう さいだん そな こつ くわしゃ  
となり、終にその成功を祭壇に供へて國家社  
くわい ほうし で き い しん こ  
会に奉仕することが出来ると云うのは、眞個の  
じゅうしき けつじつ かち はんだん もたら  
常識の結實で、價値ある判断の齎したもので  
さいこんたん なか ひと り おのれ  
あらう。『菜根譚』の中にも「人を利するは己を  
り まと こん き い り えき けんりょく  
利する的の根基なり」と言ってゐる。利益權力  
ろうだん かんが ごと じゅうしき さい か  
の壟斷(注2)を考ふるが如きは、常識の最下の  
ものであらう。

じつせんきゅうかう  
(注1) 實踐躬行: 口で言う通り実際に身をもって行うこと  
(注2) 壟斷: 利益を独り占めにすること

# 米山梅吉記念館

## 記念館の歴史

—黎明の頃から  
旧記念館建設とその運営—

米山梅吉記念館は本年、創立から50年を迎えます。この50年を記念し、館報2018秋号から3回にわたり記念館の歴史について記しています。平成17年に記念館の創立35周年を記念し、米山梅吉記念館の元常務理事で弁護士の井口賢明氏（沼津北）の手により出版された『超我の人 米山梅吉の聲音』の第3編 財団法人米山梅吉記念館の歴史より原稿を引用しご紹介させていただきます。尚、紙面の制約上一部抜粋・要約しております。

### 建設経緯③

## 第3章 新しい記念館の建設とその後

### 2. 記念館建設委員会の発足

平成7年8月の記念館理事会に於いて米山記念館建設委員会設置が満場一致で可決、建設委員会委員が決定し、第1回建設委員会が同日開催された。先ず建設設計にあたっての基本的な考え方が論じられた。主なものは以下のとおりである。

- 1.全日本のロータリー会員が集えるメッカ的な存在とする。  
そのためには米山梅吉翁の資料を調査蒐集して展示保管する。
- 2.日本のロータリー発展に寄与された多くの先輩会員の資料を蒐集・保管し出来る限りの展示を行い、更に日本のロータリー史が一望できるパネル展示を行なう。
- 以上を骨格として設計に関しては以下の諸項が決定した。
- 3.設計には富士箱根の眺望を望めるように配慮し、田園風の環境維持に配慮する。
- 4.旧記念館は残し、本館と連動させる。
- 5.高さは3階以下とし、屋上に富士を展望できるように配慮する。
- 6.高齢者、身障者に配慮し、エレベーターは設置する。
- 7.駐車場は最小50台は確保する。
- 8.建築総面積は250～300坪とし、建築費は坪100万円を目安とする。

### 3. 建設用地

用地については既に旧館隣接地が決定されており、何も心配ないことが担当者を勇気づけていた。この地はそれまで米山梅吉児童公園として保管利用されていたところであり、園内に竹林、清流のせせらぎが貫流する絶好の地であった。広さは休館敷地と合わせて約1000坪、この敷地がなければ後の新館建設は不可能であった。

### 4. 建設費獲得への始動

膨大な建設費をいかに工面するかが、連日議論された。財団法人の基金は寄附行為により建設費に充てることは出来ず、又変更しても到底足りる額ではなかった。

ただ一つ関係者の中でも灯りとなっていたのは米山梅吉という偉大な名前とそれを敬仰する日本全国のロータリアンの力に期待する不安を伴いながらも明るい希望であった。

又、米山という冠名の財団法人米山記念奨学会が全国の会員醵金により輝かしい実績を積み上げているという師表があつた。

平成6-7(1994-95)年度第2620地区大会が山梨県富士吉田市で行われた。時のRI会長代理は東京ロータリークラブの玉村文夫であった。その席で玉村から「東京ロータリークラブは次年度創立75周年を迎えるが、その事業として米山記念館に相当額の寄附の用意がある」と告げられた。実際に2000万円という高額なものであった。

そのようないきさつの中で、第二記念館は何としても作りたい。この機を逸したらもう当分機会はないと思い定めて、その建設の意思を確認、建設費は全額寄附、その殆どを全国のロータリアンの善意と理解に仰ぐことに決定した。寄附総額の目標は最小5億円、内建物に3億円、展示保管施設に約2億円を見積もった。

### 5. ガバナー会への陳情

第1回の陳情が行われたのは平成6年(1994)7月1日、新年度の発足する第1回のガバナー会で、ガバナー内藤成雄と記念館理事長坂本豊美が特別出席した。議長は後に記念館理事に就任した小久保晴行(東京江戸川)であった。ガバ

ナー内藤と理事長坂本は限られた時間であったが、懸命に陳情し縷々説明した。

結果は予想していたとおり満場一致、順風満帆というには程遠かった。過半数は総論的には肯定だが、地区に帰つて諮問委員会にはからなければ何とも言えない。

その一方では、関係者の動きに賛同して朗報が次々ともたらされた。

その一つ、東京ロータリークラブであった。東京クラブは大正9年(1920)創立、初代会長は米山梅吉である。平成7年(1995)創立75周年を迎える。それを記念して恒例の記念行事を行うのを縮小し米山記念館第二記念館創立に向けて何分の寄附をしたい、という内示を頂いたことであった。

その二つは、記念館所在地元、長泉町であった。同町は米山梅吉を生んだことを誇りとし、又、米山文庫をはじめ教育関係の多額の寄附を受けた恩顧もあり米山デーをつくり町民学童生徒に米山精神を啓蒙している町である。

町ではロータリーがそのような計画があるならばと、自主的に貴重な歳費のうち2000万円を寄附すると申し出たことであつた。

その三は、米山記念奨学会であった。理事長坂本も後に述懐しているが、この話は意外に難航した、要約すれば、米山記念奨学会の寄附行為(定款)による問題であった。つまり、この寄附行為では奨学生への奨学金補助以外は全く認められない、どうしてもなら寄附行為変更を申請しなくてはならない、と憲法改正にも似た壁であった。請願はその後も熱心に続けられた。その結果、終に時の末永理事長の英断によって5000万円の助成が実現した。そして温度格差の大きい二つの米山冠名法人に共通の米山精神、言い換えれば米山余徳のようなものがこの善意と理解と前進を生んだものと思われる。この裏には奨学会の高野、増田2人の副理事長の尽力もあつたことを述べておく。

その四は、第2620地区である。もともと米山記念館の運営は同地区的会員年額1人300円相当の地区資金によって賄われていた。この金額は平成6-7年(1994-95)、内藤成雄ガバナーユニットに1人1000円に増額されていたが、これとは別に地区資金から1000万円の助成が決定されていた。この決定は平成8-9年(1996-97)の青島廣幸年度であった。

それにつけても急がれたのは全国のロータリアンに呼びかける募金運動の行方であった。

既に第1回の請願を終えこの年度保留となつた同計画は

平成7-8年(1995-96)年度にもちこされていた。この頃には既にこの計画に対する諸批判があちこちから聞こえはじめていた。しかし、この壁を突破しないことには新館建設は実現しないことであった。

平成7(1995)年度のガバナーユニットに第2回の陳情が行われ、事情説明とも弁明とも悲願にも似た請願は、ガバナーユニットとして満場一致の賛成決議とまではいかなかつたが(本質的にガバナーユニットは決議機関ではない)、大方の理解を示す納得で決着をみた、といえるであろう。その反響はそれぞれの全国の地区単位で協力激励の朗報が寄せられたことでもうなずけたのである。

## 6. 募金開始

平成8年(1998)4月28日、全国規模に組織を拡大された全理事出席のもとに、理事会が行なわれた。責任者として理事長坂本は慎重に更に検討する発言もされたが、出席理事は全員が理事長に最終決断をお願いした。

決定がなされた募金の内容は以下のとおりであった。

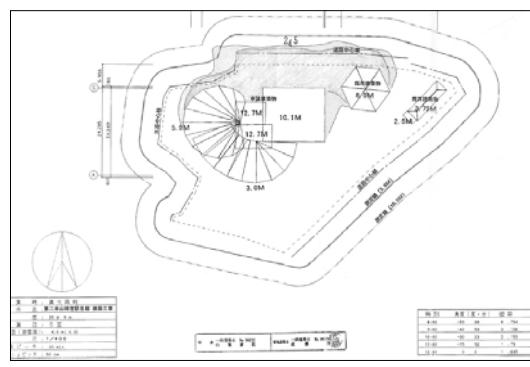
1. 第2620地区会員は1口6000円

2. 第2620地区以外のロータリアンは1人3000円をお願いする

3. 特別寄附(1口10万円以上の寄附者には功労賞、記念品)とし、平成8年7月1日を期して全国ガバナー、およびクラブ会長宛、建設趣意書をそえて上記内容の募金呼びかけの文書を発送した。

全国のクラブに文書を発送するのはかなり困難な仕事であった。クラブ数は2000を超える所在確認を費用削減のため関係者小人数だけで行なつた。このスタッフは常務理事幾田を中心近隣クラブの運営委員の会員が担当した。

## 7. 新館の建設



### <工事着工>

着工をめざしての建設委員会は平成8年6月16日に行なわれた。その席で総合設計株式会社に設計を依頼することに決定した。山梨社長はロータリアン(清水北)であり、面識のよしみで設計費を随分安くしていただいた。外観は今の形におちつくまで、いくつかのデザインを提出していただいた。最終的には現在のものに落ちついたが、ホールの円錐系と展示室の立方系が見事にマッチしたグッドデザインで皆文句なくこの設計に従った。

平成9年6月の委員会で展示施行業者に株式会社乃村工藝が決定。建築会社は一般応募入札制度により平成9年7月10日、株式会社石井組が落札した。同社石井社長もロータリアン(吉原)、米山梅吉ゆかりの仕事をさせていただくならと思い切った低価(2億2800万円)で落札した。予想外の廉価だったので、関係者は喜び、安堵し米山の力を思った。



入札受付



鍼入れ



地鎮祭



工事着工

た郷土史家柏木勲によって分類整理された。更に日本ロータリー各地区、各クラブの資料の寄贈分、作業机等々が整った。

### <落成式>

待望の落成式は平成10年4月28日に行なわれた。この日は米山の命日、記念館春の例祭として行われた。定刻前に招待者、参加者約300名が集合し、屋上にまで人が溢れて白雪の富士を楽しんでいた。

この日をもって第二記念館乃至新館の呼称だった館名を統一して「財団法人米山記念館」と呼ぶことにした。



落成記念式



この後、財団法人米山梅吉記念館は平成23年に公益財団法人に移行、新館落成後旧館となった建物は、記念館創立40周年記念事業の一つとして改修し、米山文庫こども図書館として平成22年4月29日に開館いたしました。

平成9年7月16日地鎮祭が行われ、工事は順調に進行し日一日と北側に向いたつ富士に向かって高度を増していった。展示室の仕様は、第1室は米山の生涯、歩いたみちをパネル形式で壁面を飾ることにした。その下に著書、筆跡、外一面は青山学院系列、解説文、英訳も入れた。第2室は米山個人の書軸、書簡、遺品、著書、2室の境の壁面は米山と関わりをもった家族、財界、教育、文芸面の錚々たる人々の写真で飾った。第3室は日本ロータリー五十年史のパネルによる縮小展示、一隅に米国ウエアレンス大学卒業時のガウンと角帽が置かれた。ロータリー史は開館時昭和30年まで、その後追加展示された。

その奥は収蔵庫、旧長屋門に蔵されていた米山の蔵書が可動式書架に部門別に保存された。この整理は旧館時勤務し

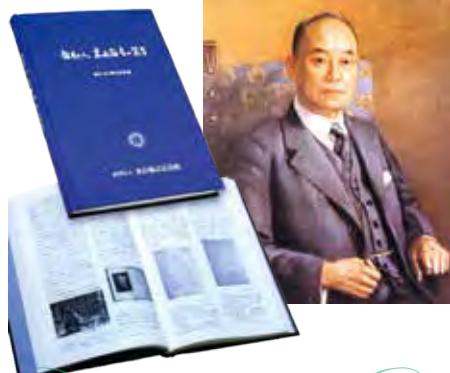
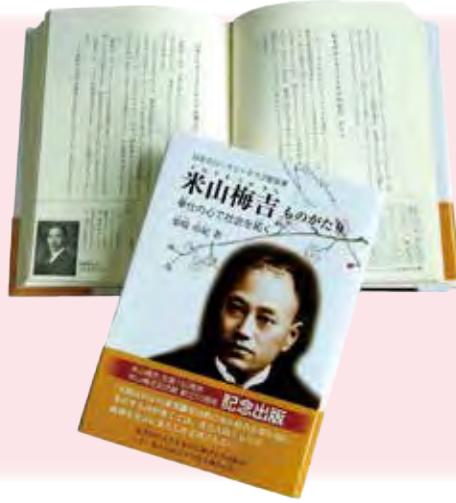
# 米山梅吉翁、米山梅吉記念館をさらに深く知るために…。 ロータリアン必読の書

## 『米山梅吉ものがたり』

生誕150年・財米山梅吉記念館創立50周年  
記念事業出版

明治、大正、昭和にわたる激動の日本に「奉仕の理想」を実現した人。我が国ロータリーライクラブの祖、社会への奉仕を生涯の信条とした、その根源が読み明かされる。

小・中学生から読める  
【伝記】ジュニアノンフィクションシリーズ  
令和元年7月 銀の鈴社発行  
著者／柴崎由紀  
A5判 280頁 1,800円(税別)



## 『超我の人 米山梅吉の聲音』

創立35周年の記念出版。ロータリアン、教育者、社会奉仕者としての米山梅吉研究を集大成した最良の一冊。「米山梅吉の生涯や業績」「ロータリーとのかかわり」「記念館の歴史」など、詳細な解説がなされている。資料編には、講演、月報やラジオ放送なども掲載。館所蔵の図書目録、年表なども網羅されている。

財米山梅吉記念館編集・発行  
B5判 260頁 2,500円(税込)



## 米山梅吉俳句集『藍壺俳句』

創立40周年事業として、米山梅吉翁の俳句を整理し、翁が未済のままとした俳句集をまとめ、記念館所蔵の草稿と思われる『藍壺俳句』を精査、見直すとともに、翁が所属した句会、白人会（大正5年11月、巖谷小波主宰）での句の採取を手掛け、米山梅吉俳句集『藍壺俳句』として刊行。

財米山梅吉記念館編集・発行  
A5判 76頁 1,000円(税込)

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。  
商品が到着しましたら同封の振込用紙にて代金をお支払いください。  
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財團法人 米山梅吉記念館  
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

### 米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分  
東名沼津ICより15分

[開館時間]午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日

●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

### 米山梅吉記念館 館報

Vol.34 秋号

発行日／令和元年8月20日

発行者／公益財團法人 米山梅吉記念館 理事長 積 惟貞

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL(055) 986-2946 FAX(055) 989-5101

URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail [yumh@ai.tnc.ne.jp](mailto:yumh@ai.tnc.ne.jp)